

玉露の話し（仮称）

四月、日本のお茶畑のことです。

まだ収穫を経験したことのない、小さなお茶の樹がありました。

毎日、職人さんがやって来て、お茶の樹の世話をしてくれます。小さなお茶の樹の坊やは、いつもの時を楽しみにしていました。

今日も職人さんはいつものようにやって来ました。ところが、お茶畑のまわりに足場を組み始めるではありませんか。

「いったいどうしたの？」坊やは、そばにいる年上の樹にたずねました。

「ああ、これはね…、毎年のことだよ。一年で今の時期（4月中旬）に、職人さんは僕たちのまわりに足場を組みにやって来るのさ。」年上の樹は言いました。

「それからどうなるの？」

「まあ待って、見ていてごらん。」

足場を組み終わると、職人さんはそれに黒い覆いを掛け始めました。

「僕こわいよ。」坊やは、年上の樹に言いました。

「どうして彼は僕たちを覆ってしまうの？僕たちのことが好きじゃないの？」

「もちろん大好きだよ。」年上の樹は答えます。

職人さんが帰ったときには、坊やたちの周りのお茶畑は完全に覆いが掛けられてしまいました。

「どうして僕たちをお日さまから隠してしまうの？ちゃんと成長してほしいのかなあ。」

「まあ待って、見ていてごらん。」年上の樹が言いました。

坊やは待ちました。数日が過ぎても、黒い覆いは取り除かれません。

坊やは怒っていました。

「職人さんは僕たちを駄目にしたいのじゃないか…。」と思い、さびしい気持ちになっていたのです。

「何のために僕たちをお日さまから隠すのだろう… 他のお茶畑は覆われずにいるのに。どうして僕たちはそうされているのかな…」

毎日、職人さんは今までどおり、坊やの様子を見て世話をするためにやって来ました。それでも、覆いは取り除かれません。坊やは、ますます悲しくなりました。

「僕の人生はおしまいだ。誰も僕の茶葉を摘みたいなんて思わない。葉っぱは濃い緑色にならないし、ビタミンもたくさん作れないだろうから。」

覆いを掛けられてから約20日後、職人さんは数人のお茶摘みさんを連れて来ました。彼らはお茶の樹の新芽（その年に新しく出た葉のこと）を摘み始めたのです。坊やは興奮してきました。

「やっぱり僕の葉っぱは収穫されるかもしれないなあ。」と坊やはうれしく思いました。

すると、職人さんとお茶摘みさんたちが、覆いの掛かっていたお茶の樹の新芽を自分の手で摘み取っているのに対して、他のお茶畑は全ての部分を、機械で刈り取られていることに気づきました。

「どうして職人さんたちは、僕たちの新芽だけを摘み取っているの？」と、坊やはたずねました。

「それは、職人さんが一年掛けて大切に育てた栄養たっぷりの新芽を摘み取りたいからさ。」年上の樹は答えました。

「でも、どうして彼らは他のお茶の樹のように機械を使う代わりに、僕たちの茶葉を手で摘み取るの？」

「ああ、それは僕たちを傷つけないようにするためだよ。僕たちはとっても大切にされているんだよ。」

坊やがこれらのことを考えていたちょうどそのときに、何人かのお茶摘みさんが話しているのが聞こえてきました。

「この小さな樹を見て。」と、ひとりのお茶摘みさんが言いました。

「みんなが待ち望んでいる最上級の玉露が、この小さな樹から採れるのだわ。」

「そうだったのかあ…。」

坊やはそれを聞き、自分が大切な存在なのだとわかったのです。

玉露について

玉露は日本緑茶の王様とされています。まったりとした旨味・甘味を持つお茶として知られています。

それは、収穫前の20日以上にわたって覆いがかけられ、茶葉の中のテアニン（アミノ酸の一種）という物質が作られるためで、その結果、茶葉はより旨味・甘味を持つようになるのです。

最高級の玉露の味わいは渋み・苦みがなく、とろりとした旨味・甘味に、多くの方がびっくりされる味わい。温めのお湯でゆっくりと玉露の持ち味を引き出すのがポイントです。

舞妓の茶本舗のある京田辺市は、日本有数の玉露の産地として知られています。